

アメリカの大学生の言語使用における性差意識

齋藤 理香

「ことばとジェンダー」研究は、社会の中の言語・言語使用・言語意識や態度における性差を問題化することで発展してきた。教育現場では、言葉と性差の実態や意識を単に反映するに留まらず、それらを強化・規範化する可能性も孕んでいることから、特に注意が肝要である。本発表では、アメリカにおける「ことばとジェンダー」をめぐる研究と教育について、具体的には「大学教育の現場で、性差と言語使用がどう認識されている（またはされていない）か」について、2、3の研究例の紹介と、自身（発表者）の研究・教育経験を基に考察した結果を報告する。

まず、アメリカの教育現場における「ことばとジェンダー」研究を概観する。Litosseliti (2004) によると、1980～1990年代の研究では、教室内の教師と生徒、あるいは生徒間のインターアクションにおける女・男の違いがいかにか「差別」または「差異」を生じさせるかが特に問題化されている。たとえば、教師は女子よりも男子のほうに頻繁に質問を投げかけ、長い発言の機会を与え、他の生徒の発言をささげるのを許し、クラス討論の際は男子が興味を持ちそうなトピックが選ばれる傾向があるという(74-75)。これは「差別」を問題とする研究だが、一方で男子と女子のコミュニケーション・スタイルの「差異」に焦点をあてた研究もある。たとえば、会話を持続するために、女子が男子に率先して質問したり、あいづちを打ったり、手ぶり身振りで相手が話しやすいように振る舞う。さらにグループ行動では、自分の意向を主張するより相手も含めて「let's～しましょう」のような言葉を多用する(77)。「差別」か「差異」かは「ことばとジェンダー」論で常に議論を呼んできたが、最近では教育現場での gender-inclusive language (GIL：性別包括的言語)

にかかわる研究が注目されているようである。

GIL (性別包括的言語) が問題となる背景には、従来の女性・男性という限定的な (exclusive) カテゴリーには収まり切らない LBGTQ gender 認知の拡がりがある。Patev 他 (2019) は、アメリカ南部の大学で GIL と Transgender (TG) の関係について調査し、TG にネガティブな考えの者は GIL を使いたらと感じ、TG に理解のある者だと GIL を使いたらと感じる割合は減るが、実は研究に参加したどの学生も日常生活では GIL を使っていなかったと述べている。McEntarfer and Iovannone (2022) は、TG 学生の chosen names and pronouns (他者に使ってもらいたい呼び名や人称) に対する大学教員たちの考え方を調査し、教員の多くが学生たちの要望にできる限り応えたいとしながらも、自分の呼び名を数週間ごとに変えたり、奇妙な造語を使ったりする学生には抵抗を覚え、要求を全てかなえるには限界があるとの回答を示している (637)。GIL は、フェミニスト言語学が発展し始めた1970年代から議論や改良が重ねられてきたが、今でも古くて新しい課題だといえる。

発表者は2023年4月、勤務先の州立大学で、gender theories も取り入れた近代日本文学クラス (文学クラス) と、文化史や思想史を軸に日本を紹介する文化クラス (文化クラス) で簡易な質問票による調査を実施した。前者では在籍12人のうち11人 (男4、女5、その他2) から、後者では23人のうち14人 (男9、女5) から回答を得た。「教室で自分自身の言語使用と周りの学生たちの言語使用について考える際に gender の差異を意識するか」という質問を軸にいくつか関連事項を尋ねた。gender の差異を「意識する」と答えたのは文学クラスで11人中8人だが、gender の差異を一切考えたことがないという学生1人を除き、全員が男・女、LBGTQ の違いを超えて互いを尊重すべきだと回答した。gender による言葉の違いは、表現・ピッチ・声の大きさ・ジェスチャーなどの側面を感じている。「どうしてそのような違いを感じたと思うか」には「自分／周りの学生たちが女性または男性だから」(これは発表者が「引っかけ」で入れた選択肢) と答えた者が多かった。日頃から LBGTQ と自認している学生の回答では、自身の言語使用では gender の差異を意識しないが、他者においては認識し、彼らの話し方に gender による違いが出るのは彼らが男か女かのいずれかであるから、そして男らしくまたは女

らしく見せたいからだろうと答えている。文化クラスでは、3人（男2女1）がgenderを特に「意識しない」と回答、「意識する」と答えた9人は全員、自分の周りの学生たちの言葉にgenderの違いがあると意識しているが、そのうち2人は、自分自身はgenderを意識して話していないと言っている。簡単にまとめると、学生たちは自身にも他者にもgenderによる話し方に差異があると認識し、そのような違いがあることには多くが「自然だ」と答え、「差別的だ」と回答したのは2人だけだった。発表者自身は、学生がこう呼んでほしいという要望には100%応じているが、上記先行研究にあるように、時に呼び名が変化することに戸惑うこともある。在学中に性転換手術をする学生もいるが、呼び名や髪型、服装などでtransする者が多い。教職員の側は、「ことばとジェンダー」をめぐる学生の変化に柔軟に対応していく姿勢が求められる。

[引用文献]

- Litosseliti, Lia. (2004) *Gender & Language: Theory and Practice*. London: Hodder Education.
- McEntarfer, Heather and Jeffrey Iovannone. "Faculty perceptions of chosen name policies and non-binary pronouns." *Teaching in Higher Education* (2022) Vol.27, No. 5: 632-647.
- Patev, Alison J. et al. "College Students' Perceptions of Gender-Inclusive Language Use Predict Attitudes Toward Transgender and Gender Nonconforming Individuals." *Journal of Language and Social Psychology* (2019) Vol.38 (3): 329-352.

（さいとう りか・ウェスタン・ミシガン大学教授）